

## 六十年前の軍隊と

### 終戦五十年を顧みる

長野県 梶原春藏

生まれた所は秋田県の山村、二十歳にして父と死別、兄二人と共に母の手により生育され青年学校卒業。兄二人は徴兵検査には甲種合格であったが兵役免除、母の兄弟は三名とも軍隊出で、伯父①は日露戦争で戦死、伯父②は陸軍工兵、伯父③は海軍で最後は昭和十二年ころ哈爾濱港防艦隊司令部の大尉で戦死。

私も家は貧乏農家であったので昭和九年、満州事変中に軍隊志願、「数え歳十八歳」まだ子供だったと思うが図らずも合格し、昭和九年十二月一日、満州独立守備歩兵第一大隊第二中隊に入隊。所在地は奉天と新京の間で開原というのみです。

だが入隊して見ますと軍隊という所は大変なところだと思いました。先輩から聞いてはいましたが、これ

程のところとは思いませんでした。夜になるとアチコチでビンタの音、何と申しても満州事変の二、三年兵がいたから私なども二年兵の尻にかかり、帯皮でたたかれ、鼻から血を出しました。「軍隊」は「運隊」と聞いていましたが、本当にそうだと思います。

初年兵教育中に擲弾筒射手の教育を受け、初年兵教育終了と同時に匪賊討伐に出動、ほとんど昭和十二年の暮れまで討伐に出ていました。あるときは満馬を借りて行動中匪賊と遭遇、弾丸の来る中を馬は走らず、私もこれで終わりかと思つたこともありませぬ。また、あるときは私の隣五十七センチぐらいの所にいた分隊長が敵弾が頭に当たり戦死なされた。そんなとき、私の擲弾筒弾が敵中に命中。その功により昭和十二年十一月ごろと思われる勲八等と満州事変従軍記章を下賜されました。そのころ、討伐中に軽い肋膜炎という病気になる奉天陸軍病院に入院加療しました。

昭和十三年四月満期除隊、同年五月陸軍造兵廠東京工廠に入職。同工廠にて補充兵教育に当たり、翌十三年三月、同年兵の呼び掛けにより元南満州鉄道線に入

社。勤務地は哈爾濱鐵道建設事務所警務課でした。

そのころより既に日本政府、軍部方面に大戦の考えがあったのではないかと思われれます。私は入社直後、北滿黒河省黒河方面に出張。これは軍部の命令だったと思われれます。黒河といえば川向こう五百メートルぐらいがソ連、夏は川向こうで洗濯する姿が見られ、冬は川の上が凍り自動車が見られるという満州とソ連の国境でした。

私たちの任務は黒河駅より一つ手前、神武屯という駅より興安嶺に向かつて踏査測量することから始まり、鐵道敷設まで神武屯―山神府間四〇キロぐらいを昭和十七年ころまで出張。大東亞戦争勃発の十二月八日は黒河において聞きました。その間昭和十五年に結婚、同十六年に長男が生まれ、十七年には黒河より哈爾濱―佳木斯間の南叉という駅へ行き、そこより新設三〇キロ・五五キロと新設の鐵道敷設の「突貫工事」に従事しました。この工事は踏査測量から敷設まで五五キロを二カ年弱で完了したものです。

昭和十八年三月、哈爾濱鐵道建設事務所経理課勤務

を命ぜられると同時に事務所勤務者の補充兵教育兼務に従事。二十年八月十二日、私には召集令状というものはなく、電話で「八月十二日午後三時まで哈爾濱神社に集合されたし」とのことであったように思います。集合場所は勤務個所のすぐ前なので安易だったが、受けはされたものの、十二日晚はそのまま神社の境内に約二百名ほどいたように記憶しています。八月だったからいいようなものの着た切り雀とは。それがなんと十二日のみならず、十三日、十四日と境内に三泊。食事はおにぎり、またはパンと牛乳だけ。

ようやく八月十五日午前八時ごろ神社を出発、着いた所は香坊という所、そこで軍服に着替え、終わったのが十二時ころでした。だれ彼とはなしに日本は負けたという声にだれも信じる人はなく、ただただ皆涙々々。だれ一人として声も出なかった。午後三時ころ各人の配属命令があり、私は一人思いもよらぬ砲兵大隊本部付を命ぜられました。砲などは見たこともなく、また大隊本部などどこにあるかも知らず。本部の曹長の引率で着いた所が勤務個所より二百メートル

ぐらいの所、日本通運の二階でありました。

哈爾濱市は、その時までには案外平穏な街でしたが、それからが大変でありました。八月十九日に哈爾濱飛行場にロシアの爆弾が投下され、二十日ころよりソ連軍が侵入、侵入軍は兵隊に鉄砲の撃ち方を教えて進入させるといふものばかり、西も東も分からぬ、時計の見方も分からぬ。後ほど聞いたことだがなんでも囚人が先頭に出されたとか、でした。

日本人を見るとなんでも銃を向け、ロシア語で「ダワイ」こちらに来てとか、略奪、婦女暴行は戦争には付きものでした。哈爾濱でも看護婦等が集団自決をされたとお聞きしています。

本部要員となったが何にもすることがない、毎日ごろごろ。一度だけ衛兵司令に付いたくらいでした。二十日ころより、いよいよ情勢が緊迫、ソ連兵が多くなり右往左往するばかりです。市内は静まり返り日本人は元より満人も歩く人なく、ただ白系ロシア人が見えるくらいで自分たちもどうなることかと思えばかりでした。いったんお国に捧げた体故どうすることもでき

ず、会社や家族と電話連絡をするだけでした。もし大軍が来て犬死するようなら逃げようではないかと、全員で話合っていました。ところが二十三日、大隊長命令で取敢えず本部解散とする。皆さん元気でどこにでも行ってくれとの命により軍服を私服に着替え、妻子の元へ帰ったまでは良かったが、その晩、略奪に遭った。時計とか万年筆が欲しい兵隊ばかりです。置時計の大きい物を出したところ、「そんな大きいのはいらぬ、腕時計が欲しい」と言われ、これはどうだと腕磁石を見せたところ喜んで腕にはめ、今度は万年筆が欲しいといい、体温計を出したところ、これも喜んで持つて外の部屋に行きました。

この宿舎は満鉄青年隊舎で個室が三〇室くらいと集会場があり、二階建ての大きな宿舎でした。以前から私も青年隊員と共におり、情勢悪化に伴い青年隊員は他の宿舎に移動しましたので、私の家族と外に二家族がいました。その後、奥地より帰って来られた建設の人々が入居し、八月二十五日午後三時ころには二十人近い人が二階にいたように思われます。いずれも氏名

不明でありました。

この人たちが何か二階でトラブルがあったか、叫んだか。突然ソ連兵が銃弾や手榴弾を持って襲撃し、家にも手榴弾が二重窓の合間に入り爆発しました。辛うじて家族四人は隣の部屋に隠れ、脱出できましたが、長女は手榴弾の破片により出血多量により死亡、当時一歳半でした。この間ほんの一瞬でしたが、私たち家族には長い長い時間でした。

この直後、前から可愛がっていた中国人のボーイが入り口で、「梶原さん逃げるなら今だ、早く出てきなさい」と言った。昔の人のたとえのとおり、(溺れる者は藁をも掴む) そう思って、屋外を見ると二階に宿泊中の社員二十人近い人たちがロシヤの兵隊に整列させられ、トラックに乗せられどこかに連れて行かれるようでした。

後で聞いたことですが、哈爾濱の忠霊塔に連れて行かれ、塔の前に一列横隊に目隠しされて並ばされ、自動小銃で撃たれ、ほとんどの方が亡くなられ、一、二名の人が負傷のまま、馬家屯という所まで腹ばいでた

どり着いたと聞きます。忠霊塔―馬家屯の距離五、六キロでした。軍人以外の民間人までもこのような悲惨な目に遭わされたのであります。

私はボーイと呼ばれ部屋の外に出て見ると、兵隊は一人もおらぬのでボーイに市内の事情を聞いたのですが、「明るいうちはは歩くことは駄目だ」と言われ、地下室の風呂場やボーイの寝台の下などに隠れました。二十五日十七時ころより、また兵隊が来て歩哨に立っているで、その夜はまんじりともせず、二十六日になっても相変わらず兵隊が二、三名いる様子、またそれ以来ボーイも顔を見せず、市街の様子も分からずでした。幸い十五時ころ歩哨が引き揚げ、家内の方から塩おにぎりが届いた。兵隊の話では「まだ男の日本人がいる」と話していたという。今夜また歩哨が来るらしいと聞いた。どうも危ないとのことである。長女は箱に入れ防空壕の中に埋葬されたと聞き、長女は私の身代わりになってくれたと思いました。かわいそうなことをした。

これで私も腹を決め、妻子と別れ、おにぎり少々

の金を用意するよう申し付け、私は奉天―大連―釜山方面に向かつて行つた。妻には「内地に帰れる道が開けたら長男と共に帰るように」と言つた。幸いに思つたことは、歩哨に來た兵隊が女子供に手を出さなかつたことです。どこの国の人でも常々仲良くしておく、自分もよく見ていただけることがあるとつくづく思いました。

十七時ころ、青年隊舎の舎監片野誠氏の使いで青年隊のボーイが來て、梶原さんに片野さんからの手紙を持つて來たからと妻に話されていたようでしたが妻もためらつていた様子だつた。しかし本當に片野氏の便りと見定め、地下室にボーイを連れて來た。片野氏の手紙と確認、それには市内の情報が書かれてありました。

「そちらの方が危険なようなら当方に早速來るよう、明るいうちは危険だから暗闇をついて行動せよ」との便りです。持つべきものは良き友とつくづく思いました。

直ちに奉天行きを取りやめ、日暮れを待つて青年隊

舎に向かつて行動、この間約一・五キロくらいだつたと思われたましたが、遠く五、六キロに思われました。途中畑の中で犬に吠えられながらたどり着く。このとき二十一時ころだつたと思われれます。着いたときの喜び、片野氏とただただ抱き合つて無事であることで涙々。それに私の長女のことと併せ片野氏の奥さんも共に喜びの涙と悲しみの涙でした。

二、三日後、家族も隊舎の方に引つ越して來ました。これも片野氏の人情で、家族持ちの方が五家族となりました。それに青年隊員が三十八名ぐらいいました。

青年隊員は當時二十歳前後の人たちばかり内地より青年隊に入隊直ちに終戦という人もありました。哈爾濱市内は終戦に伴い当分の間は街を歩かぬようにとのことなので、この間何にもすることもなく毎日部屋にごろごろしていました。その内に花札とか将棋の駒を作り、将棋をさしたり腕相撲をしたりで日を送りました。その間にもソ連兵が三度ばかり略奪に來ましたが、ソ連兵が來ると青年隊員が全員出て後について歩くのでソ連兵も略奪できず出て行きました。

昭和二十年十一月ごろだったと思います。満鉄本部の方から作業団を作ることとなり、我が青年隊もこれに同調し作業に出動しました。それ以来、毎日ソ連の兵隊や将校の指揮のもとでソ連の貨物列車に十人で一車十トンの石炭を積み込む作業です。積み込みが終わらなければ帰ることができなかったのです。本当に負けた国の捕虜労働者でありました。毎日片道五、六キロ歩いて隊舎に帰るときは人影が見えなくなつてからです。

一日の苦勞を癒す隊舎に帰つても大した栄養食もなく、来る日も来る日も高粱飯。むろん弁当もそのとおり高粱飯に沢庵漬四切れほどで、たまにうどんが夕食に出れば最高でした。二十歳前後の青年隊員がよく苦痛に耐え忍んでこられたと、現在も毎年一度は全国各地を回り、会を行い、当時の思い出に夜を通して語り明かします。

ソ連の作業使役中忘れもありません。昭和二十一年一月十七日、作業が終わり帰る途中、ソ連の威嚇射撃に遭遇、私が走り逃げる最中、第四ボタンと第五ボタン

の間を貫き左手首を貫通、今でもその後遺症があります。よく昔からいう二度あることは三度あると言われますが、私には四度もあったこととなります。一回、二回は現役兵当時の討伐中、三回目は終戦時の八月二十五日、四度目は二十一年一月十七日。このときも五センチ、あるいは十センチ前に出れば腹部に命中したのです。自分ながらよく死神から見放されたものと感心したり、これで最悪の死はないと思つてゐる次第です。

そうこうしているうちに、昭和二十一年八月十日ごろだったと記憶しています。引揚げの話があり、八月二十三日、哈爾濱から満鉄の無蓋貨物車に座り、青年隊員共に家族三人で出発、帰国の途につきました。九月中旬にコロ島に着き、引揚げ隊の中に赤痢患者がおりましたため乗船できず、九月二十五日ごろ、ようやく乗船許可が下りました。船はアメリカの貨物船「O Q 92」か同93」と記憶しています。乗船と同時に引揚軍人の調査を命じられ調査に当たることとなりました。引揚軍人担当係官は、はつきりしません。野々村とい

う方のように記憶にあります。この船に引揚軍人が二百人近くおったように思われます。

無事十月三日、佐世保上陸しました。この喜びは全員に共通、全く感無量であったと思われれます。そして佐世保駅で西に東に手を振り別れを惜しみました。もちろん、四十人近い青年隊員の方々、南は九州、北は北海道の方まで、再会を誓い別れました。

終戦当時二十歳前後だった青年隊員であった人たちも、今では七十歳に近くなりました。お会いする度に「先生、先生」と呼ばれ、嬉しさ、懐かしさで、ついお酒も入り夜の更けるのも忘れ、思い出に笑いあり涙ありで、夜を明かしたこともあります。

十月三日佐世保に上陸、直ちに佐世保駅より待ちに待った故郷に向かってそれぞれ別れ、本国関東方面に乗車された私たちグループも二十人近かった方々も、名古屋に着いて別れるときは五、六人になりました。静岡、東京、東北、北海道の人たちとはここで別れ、私と青年隊のリーダー格の遠藤氏が中央西線の車中の

人となりました。今でもそのころのことを思うと、侘しく思われてなりません。

終戦後一カ年、生死を共に暮らしたグループは青年隊及び五家族のかたがたでした。私も妻が長野県生まれなのでひとまず妻の生家に立ち寄り、故郷の秋田に向かいました。二カ年くらい故郷の方で暮らしましたが、これという職もなく、雪の降る所なので、昭和二十四年に「長野県人となり裸一貫から働かなければ」と伐採から製材工など未経験な仕事につき、私には大変なことでありました。それに秋田から長野に引越しのとき、妻や子供、自分の衣類など全部が鉄道輸送中盗難に遭い、丸裸となりました。何ということでしょう。引揚げで丸裸にされ、また丸裸にされるという何という惨めさであったのでしょうか。

そして、農協、三協精機(株)と死に物狂いで働きつづけ、引揚げ後、次女、次男が生まれ子供三人となり、孫も七人あります。満州生まれの長男は現在薬品会社  
の取締役、次男は日航で課長を務めています。